

白糠高校から南へ徒歩で2分のところにある竹花商店。店内には野菜や果物といった食料品や日用品など、数々の商品が並んでいる。店主の竹花榮美子さんが心を込めて作る惣菜や魚料理は“昔ながらの味”として、地域の人たちをはじめ多くの人たちに親しまれている。

竹花さんが白糠町へ移住してきたのは、中学校を卒業してからのこと。白糠で見た海に魅かれて、ここで暮らしたいと、当時南通り商店街にあった小川商店に勤めた。「小川商店で魚をさばくことを覚

えました。今も生魚を買ってきて、干したりフライにしたりと、魚を調理することが好きなんです。食べるのは嫌いなんです(笑)」

竹花さんは昭和41年に結婚し、旦那さんと2人で二幸商店(現在の竹花商店)を親戚から継いで、二人三脚でお店を営んできた。

「結婚して、たまたまこれまでと同じような仕事をする事になりましたので、楽しみでしたし、頑張ろうという気持ちでした」

それからわずか3年で旦那さんを不慮の事故で亡くしてしまう。以来50年以上にわたって一人で

竹花商店を守り続けてきた。

「これまでただ黙々と働いて、振り返るとそれが何十年という日々の積み重ねになっただけで、ここまで続いてきたのも何か特別なことがあったわけではないです」と竹花さん。

しかし、長くから地域にいるお客さんとの関係だけで経営をしてきたわけではない。時代の変化とともに、たゆまぬ努力を続けてきた。新型コロナウイルス感染症の影響で、今はかなわなくなったが、以前は町外への移動販売を行っていた。

「おかずを100個ほど作って持って行ってたんです。今はコロナで行けなくなりましたから、お客さんも残念だと言ってきて、月に1、2回ですが、わざわざお店まで足を運んでくれる人もいます。ありがたいですね」とほほ笑む。

もう一つはふるさと納税への取り組みだ。竹花商店がふるさと納税のお礼の品として提供している一夜干しのほっけや柳かれい、ししゃもなどを詰め合わせた「海産物セット」が好評だ。

「おかげさまで、ふるさと納税の影響は大きいです。どんどん注文が入るのはありがたいのですが、寝る暇がないくらい忙しいんです」

それでもお客さんに喜んでもらえるのが第一という姿勢で、朝4時に起床し、仕入れに向かう。竹花さんは、仕事が大変でもお店をやめたいと思ったことは一度もないと、きっぱりと言いつける。

「やっぱり楽しいんですよ。『もう歳だからやめたら』って言われることもあります。『倒れるまでやる!』って言って頑張っています(笑)」

竹花榮美子

たけはな えみこ

1945年2月19日生まれ。帯広市出身。帯広第四中学校卒業後、海に魅かれて白糠町へ移住し、当時あった小川商店に就職する。趣味は編み物、お店の接客。



「わざわざお店まで足を運んでくれる人もいます。」



ふるさと納税のお礼の品としても好評を得ている竹花商店の「お魚セット」。